

声楽実習⑤

I 授業の概要

1.目的

言語を有する音楽表現の意義を考え、自らが表現したい楽曲の世界を具体的に述べたり、実際の歌唱による表現できる能力を養う。

2.到達目標

- (1)原語で芸術性豊かに歌唱表現できる。
- (2)歌唱する楽曲について、プログラムノートを作成できる。
- (3)歌唱表現における問題点を整理し、その解決方法について考えることができる。

3.関連するディプロマ・ポリシー

- (1)地域社会における音楽文化振興に貢献するために、高い演奏技術と豊かな音楽的表現力を身につけている。(技能・表現)
- (2)音楽文化に関する自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた主体的な音楽活動ができる。(関心・意欲)

4.授業の位置づけ

音楽文化コース3年生を対象とした本授業は、1年前期から段階を追って学んだ声楽領域の総括として、応用演習の最終授業として位置づけられている。

5.受講生の構成

受講登録者数は8名で、内7名は1年前期より継続して声楽領域の授業を受講しており、殆どが器楽領域（内7名はピアノ）で卒業研究を希望しており、声楽を研究に予定している受講生はいない。

6.形態・方法・授業内容

授業は、講義と歌唱演習の併用型で展開した。演習は、隔週1枠4名の個別指導を受講できる形で運営した。個別指導の受講条件は、日本語以外のテキストを選択した場合、オフィスアワーや教員の空き時間を活用して、事前にディクシオンの個別指導

を受講することを義務づけた。

各自が、学びたい歌曲の領域と学習テーマを設定し、自己申請した計画案に沿い、調べを中心とした事前学習と歌唱練習を行い授業に臨む。指導者は、発音・発語、吸法、発声法、言葉と音楽の関係等を中心に受講生の共通項となる内容の講義と、個のテーマに沿った個別歌唱指導で各自の有する演奏上の問題解決に助力した。

8名の受講生の選択領域は、ドイツリート4名、イタリア民謡1名、日本歌曲3名で、作曲家の比較研究、シューマンの歌曲集の歌唱、日本語の歌唱表現等、様々な学習テーマ設定であった。受講後、他者の個別指導や演奏に関する感想、指導による歌唱の変化、今後の改善点、改善方法などを記述して提出し、フィードバックされた情報を活用して、次回の準備を行うことを学びの基本姿勢として、技能や表現力を深めた。なお、第8回目に中間発表、第15回目は実技試験を実施し、試験では、楽曲のプログラムノートと歌い手から聴き手への質問を事前に提出させ、終了後、回答を回収した。今後、受講生の回答をまとめ各自への返却することを予定している。

II 授業改善と授業評価

到達目標への対応として、従来の授業と異なる2つの指導上の工夫を試みた。その成果は、毎授業後に提出された各受講生へのコメントと感想、ならびに受講生へのアンケート結果を分析することにより検証する。アンケートは、①を肯定的評価、④を改善の必要性を示唆する評価とした4段階評価と自由記述の併用で、無記名により実施した。アンケートの回収率は100%である。

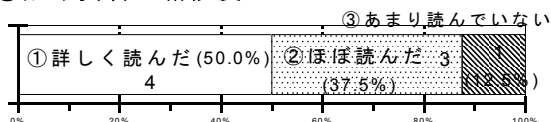
1)詩（原語）と音楽の関わりを深く考え、演奏に反映できる講義とテキストの作成

授業者は、到達目標(1)への対応として、ドイツ語の韻律と音楽に関する独自のテキス

トを作成し、講義および個別指導に用いた。日本歌曲も同様に、日本語のアクセントと旋律の関係について概説し、個別指導時に、具体的事例を示して、歌唱の留意点や指導法について述べた。評価結果を以下に示す。

◇ドイツ語の韻律と音楽に関する学びについて

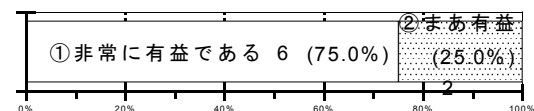
①配布資料の精読度 N=8



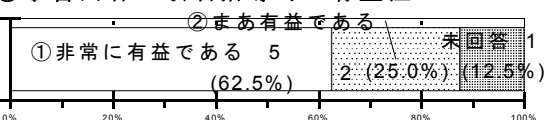
②講義内容の理解度 N=8



③配布資料の自己学習時の有益性 N=8



④学習内容の歌唱指導時の有益性 N=8



◇日本語の発音と歌唱に関する学びについて

①講義の有益性

受講者全員（8名）から、①非常に有益であるとの評価を得た。

資料を精読した学生は、その数からドイツリートを選択した学生と推測される。他の領域を学習テーマに選択した学生も概ね読んおり、授業の内容もほぼ理解できたと回答している。また自己学習や歌唱指導時の有益性が、①、②の回答を合計すると高い数値を得ており、これらの結果から、オリジナル資料の作成は有益であったと考える。日本語の発音と歌唱に関する学びの有益性を認める回答が100%であったのは、日本歌曲が身近な学習や指導の対象あるため、学びの効用と直結したのであろう。

2) 聴き手に伝わる歌唱表現を目指す姿勢の育成

自己の歌唱を客観的に捉え、想いが伝わる歌唱を具現化するために、自らの歌唱の問題点と改善する点を明確化するために、本授業では他の受講生からのコメントの活用を試みた。アンケートの自由記述のうち、活用効果に関する記述例を以下に記した。

- 自分では気づかなかったことを知ることができた。アドバイスを受けたことを練習中など、意識改善した。それが次のコメントで評価されて嬉しかった。
- 他の人のコメントで、直したいと思うところにマーカーを引き、練習する際にいつも見えるところに置き意識して直すようにした。
- 必ず練習前に読み、効率の良い練習内容になるよう心掛けた。
- 非常に参考になり、「よし!もっとやろう!!」という気持ちになれて良かった。
- 聴く人の注目点を知ることができた。
- 自分のことを客観的視点から知ることができ、他の学生のコメントを考えながら聴くことで充実した時間を過ごせた。

他者の感想や改善点の指摘を積極的に受け止め、演奏向上に活かそうとする姿勢が読み取れる。また、回を重ねる毎に長所の書き方、改善点の指摘等、上達の跡が見え、受講生の成長が実感できた。

3) ディプロマポリシーとの関連について

本授業の対応 DP は、DP3 と DP4 である。

DP3-A 高い技術の修得に対する授業評価は、＜十分貢献した＞ 87.5 %，＜貢献した＞ 12.5 %で、DP3-B 豊かな表現力の修得は、＜十分貢献した＞ 62.5 %，＜貢献した＞ 37.5 %であった。DP4-A 自己の学習課題の明確化に対する評価は、＜十分貢献した＞ 87.5 %，＜貢献した＞ 12.5 %で、DP4-B 理論と実践を結びつけた主体的学習への意欲の喚起は、＜十分貢献した＞ 75 %，＜貢献した＞ 25 %と、一応の成果を得た。

III 授業成果と今後の課題

『声楽科でないが、懸命に自分なりに「歌う」ことと向き合えた』『2年前には苦手だった声楽が今では楽しいと思えて・・・』のコメントは、授業者にとって今後の励みとなった。自らの意思による学習テーマの決定や、他の受講生からのコメントが、向学心や学習意欲の向上に繋がったと捉えている。授業者にとって、ディクシオン学習の確認やコメントの集約は、時間的負担が大きいですが、その意義と効果が実感できた。

今後は、受講生から改善の指摘を受けた個別指導の時間の均等化に努めたい。